様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：２２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０３１５３

研究課題名（和文）子どもに対する指導方略の選択過程に関する研究

研究課題名（英文）Research on the selection process of guidance strategies for children

研究代表者
佐藤　純（Sato, Jun）

茨城県立医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：２０３２７２６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：子どもに対する指導に関する問題が生じる要因の一つとして，本研究では，指導者における指導方略の選択過程に焦点を当て，子どもの指導者がどのように指導方略を選択して用いているのかを明らかにすることを目的として研究を行った。子どもに対する指導方略を「日常場面において子どもを指導する立場にある者が，子どもの適切な行動を導くために選択する行動および行動指針」と定義し，教師や教師経験者を対象に「子どもに対する指導方略使用尺度」および「子どもに対する指導方略認知尺度」を作成し，その信頼性と妥当性を検証した。指導方略の使用と認知の関連から，指導方略の有効性と正当性の認知が使用に影響することが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
体罰やハラスメントが倫理的にも教育的にも不適切であるという認識が広まっているにもかかわらず，子どもを指導する立場にある者がなぜ不適切な指導方略を用いるのか。これまでの先行研究は，まだこの「問い」に対して十分な答えを提供できているとは言えない。それらの問題の背景には，指導方略の選択過程に問題があるからではないか。以上のような問題意識の下，本研究は子どもの指導者がどのように指導方略を選択して用いているのかを明らかにすることを目的としている。このような視点から得られる研究成果によって，指導者が自らの行動を振り返ることを促し，自分自身の指導能力の向上を導くことが期待できる。

研究成果の概要（英文）：As one of the factors that cause problems in guiding children, this study focused on the selection process of guidance strategies among teachers and aimed to clarify how teachers select and use guidance strategies. The "Guidance Strategies for Children" were defined as "actions and behavioral guidelines selected by those who are in a position to guide children in daily situations in order to guide children to appropriate behavior". The reliability and validity of the scales were verified. The relationship between the use of guiding strategies and cognition revealed that the perceived validity and justification of the guiding strategies influenced their use.

研究分野：教育心理学

キーワード：指導方略　教師　子ども　メタ認知

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

子どもの日常場面の指導に関して，これまで日本では親や教師の「ほめ方・叱り方」に関する研究や幼児に対する養育態度・養育スキルに関する研究等がなされてきた。それらの結果から，指導する内容や状況とは独立して，特定の指導のやり方が子どもに一定の影響を与えている可能性が明らかにされている。それらの研究は，どのような指導方略が有効であり，どのような指導者に用いられやすいかといった指導方略の使用実態について明らかにしてきたと言える。

しかし，現在の日本の子どもに対する指導の現状を振り返ると，指導と称した体罰やハラスメントは依然として発生し続けている。体罰やハラスメントが倫理的にも教育的にも不適切であるという認識が広まっているにもかかわらず，子どもを指導する立場にある者がなぜ不適切な指導方略を用いるのか。これまでの先行研究は，まだこの「問い」に対して十分な答えを提供できているとは言えない。「体罰はいけない」等の認識を持つことは，適切な指導方略を使用する上での必要条件ではあるが，十分条件にはなり得ていないものと考えられる。指導者がどのような認知的過程を経て指導方略を選択するに至るのか，その点を明らかにすることが重要である。

２．研究の目的

本研究では，指導者が子どもに対して用いる指導方略の使用には，指導方略に関する有効性やコスト等の認知が介在すると推察し，それらが指導方略の選択に与える影響について明らかにすることを目的とした。このように，指導者がどのような認知に基づいて指導方略を選択するかに注目した点が，本研究の学術的独自性であると言える。また，適切な指導方略が選択されるための要因や過程を明らかにすることも重要である。その点について，研究代表者が長らく研究してきた自己調整学習研究では，学習者が学習方略をどのように選択するかに関してモデルが検討され，有効性やコストの認知が学習方略の使用に影響を与えることが明らかにされている。その他，援助要請に関する研究においても，援助要請行動が利益とコストの予期によって影響を受けることも明らかにされている。このように特定の行動がどのような認知に基づいて選択されるかを検討する視点を有する研究は各分野で一定の知見を生み出しており，本研究では子どもに対する指導方略に関して，この視点を適用しようとするものである。さらに，指導者自身が自らの指導方略がうまく機能しているかを振り返るメタ認知的機能も重要である。不適切な指導が行われる背景には，指導者が自らの指導方略の使用に関してメタ認知が働いていなかった可能性が推察される。本研究では，指導方略の分類の一つとしてメタ認知的指導方略を想定し，その実態や機能についても検討する。

３．研究の方法と研究成果

■研究１　大学生を対象とした被指導経験に関する自由記述調査

被調査者：大学生 25 名
調査方法：質問紙調査
調査内容：①小学校から高校にかけて指導者から実際に受けた指導で，自分が成長したと感じた指導（自由記述）
②大人が子どもを指導する際に，どのようなやり方で指導するのが効果的であると思うか（自由記述）

結果

①および②の自由記述の結果を，　KJ　法により分類したところ，以下のような 指導方略 に分けられた。

(1) 行動強化方略（望ましい行動を積極的にほめる）
(2) 傾聴方略（望ましくない行動 等 をした際に，その理由を丁寧に聴く）
(3) 助言方略（何が足りず，どうすれば成功するか等を教える）
(4) 自己調整促進方略（ 自分で計画を立てたり，行動したりするのを促す）
(5) 内省促進方略（目標や行動について，何が問題で，何をすべきなのか考えることを促す
(6) 指導個別化方略（できるだけその子どもに合ったやりかたで指導する）
(7) 指導モニタリング方略（自らの方法でうまく指導できているかを振り返る）

考察

(1)から(5)は複数の事例が示された。(6)(7)の方略を挙げた者は少数であったが，これらは外部からは観察しにくい方略であり，学習方略でいうところのメタ認知的方略に相当する重要な概念であると考えられた。

■研究２　子どもに対する指導方略尺度の作成

調査対象者：教師または保育士として働いている成人 500 名（男性 209 名，女性 291 名）
調査内容：子どもに対する指導方略尺度（原案，以下，指導方略尺度）…予備調査（公立小中学校教員 37 名)によって収集された指導方略に関する自由記述を参考に，独自に 50 項目を作成。

手続き：Web 調査会社を通じて Web 調査を実施した。
結果と考察
　指導方略尺度から自らの指導方法を振り返りコントロールするメタ認知活動に基づく指導方略をメタ認知的指導方略として独立させ，指導方略尺度とメタ認知的指導方略尺度の 2 つそれぞれにおいて探索的因子分析最尤法・プロマックス回転 を行った。因子負荷量の低い項目，複数の因子に高い負荷を示した項目を除外して因子分析を繰り返し，最終的に指導方略尺度において 4 因子（受容傾聴因子，注意指導因子，褒称指導因子，内省促進因子），メタ認知的指導方略尺度において 3 因子（調整的コントロール因子，メタ認知的知識因子，維持的コントロール因子）が抽出された。また，各下位尺度内の内部一貫性について検討すると，全てにおいて高い内的一貫性が認められた。

■研究３　子どもに対する指導方略尺度の妥当性の検討
被調査者：小学校，中学校，高校の教師または教師経験者 523 名（男性 317 名，女性 206 名）
調査内容：指導方略尺度，成人用メタ認知尺度（阿部・井田，2010），教職スキル尺度（立元他，2018），学級経営スタイル尺度（大久保他，2021）
手続き：Web 調査会社を通じて web 調査を実施した。
結果と考察
　導方略尺度の下位尺度と各尺度との相関係数を算出したところ，一般的指導方略尺度の「注意指導方略」とメタ認知的指導方略尺度の「維持的コントロール」を除く下位尺度において中程度以上の正の相関が認められた。注意指導および維持的コントロールは，メタ認知尺度の全ての下位尺度と弱い正の相関を示した。維持的コントロールは，状況に関わらず常に同じ指導をする方略であり，状況に応じて適切な行動を決定するメタ認知とは異なる傾向を持つものであることから，両者の相関が低かったことは合理的に解釈できる。また，注意指導は，直接的にメタ認知の影響を受けるものではないが，維持的コントロールと最も高い相関を持ち，維持的コントロールが高い教師は注意指導を一貫して行いやすい可能性が考えられる。それらを踏まえると，注意指導との相関が低かったことも合理的に理解可能である。
　た，教職スキル尺度および学級経営スタイル尺度との相関では，教職スキル尺度の「生徒を動機づけるスキル」との関連 のみ弱い正の相関を示した他は，中程度以上の正の相関を示し，概ね予想通りの結果を示した。
　以上の結果より，子どもに対する指導方略尺度の妥当性が確認されたと考えられる。

■研究４　子どもに対する指導方略における認知と使用の関連
被調査者：小学校，中学校，高校の教師または教師経験者 300 名（男性 212 名，女性 88 名）
調査内容：子どもに対する指導方略の使用…指導方略尺度の中から各下位尺度で因子負荷が高い 4 項目を抽出し用いた（以下，使用尺度）。
　子どもに対する指導方略の認知…上記使用尺度の項目に対して，それをどのよう認知するかを尋ねた（以下，認知尺度）。その種類は，有効性，正当性，負担感の 3 種類であった。
手続き：Web 調査専門会社を通じて web 調査を実施した。
結果と考察
　使用尺度の下位尺度と，当該の認知尺度の各下位尺度との相関係数を算出した結果，使用尺度と認知尺度の有効性認知との間で，強い正の相関が認められた。次に，有効性との関連よりは若干弱いものの，使用尺度と正当性認知との間でも強い正の相関が認められた。しかし，使用尺度と負担感認知との間では弱い正の相関が「注意指導下位尺度」「褒章指導下位尺度」「メタ認知的知識下位尺度」で認められたが，その他では極めて弱い正の相関か，有意な相関ではなかった。
　使用尺度と認知尺度との関連から，有効性と正当性が高いと認知された指導方略ほど使用されることが示され，予想通りの結果であった。一方，負担感との関連においては，弱いながらも正の相関が示され，学習方略ではコスト認知は使用に対して負の影響を与えていたのとは異なる結果であった。学習方略とは異なり，指導方略は教師が仕事として実行する行動であることから，負担だから実行しないという関係にはならなかったものと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 佐藤純・向居暁・廣田信一
２．発表標題 子どもに対する指導方略の作成
３．学会等名 日本教育心理学会第64回総会
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐藤純・向居暁・廣田信一
２．発表標題 子どもに対する指導方略尺度の妥当性の検討
３．学会等名 日本教育心理学会第65回総会
４．発表年 2023年

１．発表者名 佐藤純・向居暁・廣田信一
２．発表標題 教師は 指導方略 をどのように認知し使用しているか：子どもに対する指導方略における認知と使用の関連
３．学会等名 日本心理学会第87回大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	向居　暁 (Mukai Akira) (80412419)	県立広島大学・人間文化学部・教授 (25406)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	廣田　信一 (Hirota Shinichi) (70292406)	山形大学・地域教育文化学部・教授 (11501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関